

神風特別攻撃隊 護皇白鷺隊

「君知るやここを巢立らし 若鷺が沖縄の海に
散りて果てし」 小林 正

時が経つにつれて戦争の惨禍、特攻隊出撃の事実が忘却の彼方に押しやられ風化されつつある。ここ鶴野飛行場でも其の悲劇があつたことも、今の若人たちには知られていない、特攻は歴史の一端としか感じられていないのが現状である。同じ年代に生きた特攻隊員の事を忘れて平和を語ることは出来ない。

太平洋戦争も後半となりつつある昭和20年2月、沖縄に米艦隊の上陸が予測されると同時に陸海軍航空隊では、特攻隊員の志願を募った。姫路海軍航空隊でも練習中の訓練生を始め、教官、教員の中より約100名が選ばれた。以来、航空隊では、平常訓練から特攻訓練に変わった。各航空隊からも若い航空兵が呼ばれて來た。

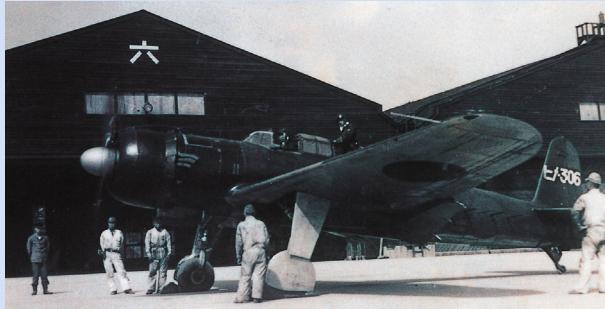
3月23日、白鷺隊出陣の日、冷酒と“するめ”で別杯の儀式が行われた。露木専治司令が訓示、それに答え隊長 佐藤清大尉が「では征って来ます。」の挨拶がわり、航空隊始まって以来の97式艦上攻撃機と『天山』の全機離陸の航空隊創設始まって以来の壮挙となつた。送る者、送られるものの最後の日であった。4月6日、菊水作戦一号が発令され九州、台湾各地の航空隊より出撃した。そして340名(221機)の若人が突入散華された。白鷺隊の攻撃は第5次まで行われ、63名(21機)が還らぬ人となった。

沖縄の海に彼らは眠っている

昭和20年4月6日、第一護皇白鷺隊 13機 佐藤 清中佐 以下38名
昭和20年4月12日、第二護皇白鷺隊 4機 野本 純中尉 以下11名
昭和20年4月16日、第三護皇白鷺隊 2機 栗本敏夫中尉 以下 5名
昭和20年4月28日、白鷺赤忠隊 1機 後藤 憎中尉 以下 2名
昭和20年5月4日、白鷺揚武隊 1機 中西 要中尉 以下 2名

そして54年振りに彼らは安堵の土地へ戻つて來た

うずらの 鶴野平和祈念の碑苑である



姫路基地を出陣する『天山』艦上攻撃機一二型

◆ご案内図◆



うずらの 「鶴野平和祈念の碑苑」のご案内

- 加西市鶴野町 自衛隊訓練場中央部西
- 駐車場 碑苑横30台、観光バス5台
- 資料展示 食事処『たこの散歩』
TEL(0790)49-1232
- 交通のご案内
 - ☆JR姫路駅より神姫バス 北条まで1時間
北条よりタクシーで10分
 - ☆JR加古川線粟生駅より北条鉄道にて法華口駅
タクシーで5分
 - ☆中国縦貫道加西インターから車で10分
山陽自動車道加古川北インターから車で10分
 - ☆加古川バイパス加古川西I.Cから車で20分

【鶴野平和祈念の碑苑保存会】

〒675-2102 兵庫県加西市中野町943
TEL(0790)49-0759 FAX(0790)49-0989
ホームページ <http://www1.ocn.ne.jp/~hironao/uzurano.htm>

【加西市観光案内所】(北条町駅 待合室内)

TEL (0790) 42-8823

ホームページ <http://www.kanko-kasai.com>

うずら の
鶴野

平和祈念の碑苑



姫路海軍航空隊
川西航空機鶴野工場

鶴野平和祈念の碑苑

その歴史的背景と由来について

昭和16年12月8日、ハワイ真珠湾攻撃によって勃発した太平洋戦争は、航空戦力の優劣が彼我の戦局を左右するものとなった。

翌、昭和17年、ここ鶴野台地が、空母に搭載する艦上攻撃機の練習用飛行場を建設する候補地となった。地元勤労奉仕団、朝鮮の人々、学徒動員の生徒、建設関係の職人らが総動員され、人海戦術の突貫工事によって、昭和18年10月1日姫路海軍航空隊が開設された。全国から集まった若人たちは、ここ鶴野飛行場で日夜の猛訓練に励み、卒業と一緒に次々と前線部隊に配属された。その数、約500名であった。

2年間にわたり、若人たちの運命的な出会いと別れ、そして命をかけたドラマが展開される舞台となつたのである。

当時、姫路市内の川西航空機では、海軍の最新鋭戦闘機「紫電」「紫電改」が改造されていた。組立後現地で一旦分解し、夜間、馬車で鶴野飛行場へ運んで組立て、テスト飛行を行ない、海軍に引き渡された。実用機の練習航空隊と最新鋭戦闘機のテスト飛行の両機能を併せもつ全国的にも稀な飛行場であった。

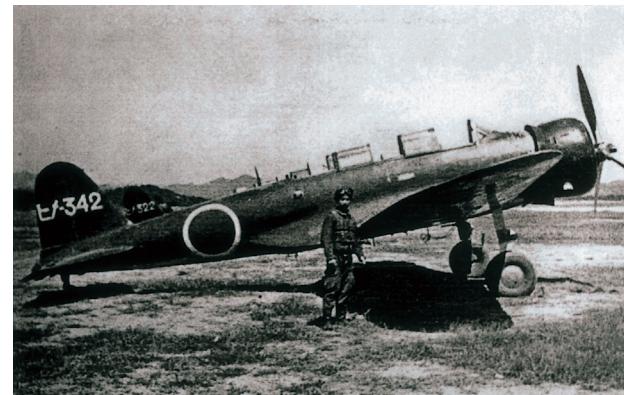


突入寸前の97式艦上攻撃機ヒメ315号（海田少尉乗機）

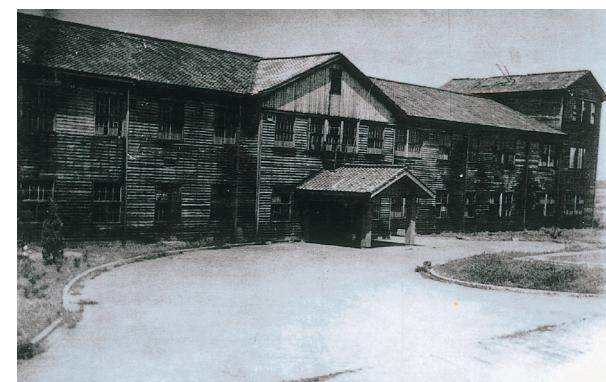
昭和20年、破局的な戦局の中、ここ鶴野飛行場において、神風特別攻撃隊「白鷲隊」が編成された。昭和20年3月23日、16歳、17歳の少年を含む若人たち63名21機は九州に進出、4月6日から数次にわたる出撃で全員、沖縄海域において散華した。

戦後54年を経た、平成11年に至り、旧海軍関係者、地元有志が協力し特異な歴史的背景をもつ鶴野飛行場跡を貴重な歴史遺産として後世に伝えるとともに、尊い犠牲の上に築かれた今日の平和が、永遠に続くことを祈念し、鎮魂の思いを込めて、この碑を建立したものである。

併せて、航空隊開設の10月に因み、毎年10月第1日曜日に平和記念祭を執り行うこととした。



練習機に使用された97式1号艦上攻撃機（B5N1）



姫路海軍航空隊本部庁舎



姫路海軍基地の概要

| | |
|---------|-------------------------|
| 基 地 名 | 姫路海軍航空隊（陸上） |
| 所 在 地 | 兵庫県加西郡九會村・下里村 |
| 航空隊開設 | 昭和18年10月1日 |
| 完 成 年 月 | 昭和19年5月 |
| 施設所要経費 | 16,687,219円 |
| 面 積 | 2,531,040m ² |
| 滑 走 路 | (コンクリート舗装) 1,200m×60m |
| 々 | (転圧) 1,500m×60m-2本 |
| 誘導路 | 8,000m×30m |
| 掩体壕 | 55ヶ所（無蓋）中10ヶ所、小45ヶ所 |
| 格納庫 | （木造）40m×120m-2棟（4+4） |
| 兵舎 | 8,919m ² |
| 収容施設 | 1,326m ² |
| 主要使用機種 | 93式中間練習機・97式艦上攻撃機 |

川西航空機株式会社
姫路製作所鶴野組立工場

鶴野飛行場には海軍航空隊の他に、川西航空機姫路製作所鶴野組立工場が在った。ここでは局地戦闘機『紫電』を製造していた。もともと武庫川河口の川西航空機鳴尾工場のみで作られていたが、日本海軍は『紫電』に期待し、増産を命じた。

しかし場所の制約もあり生産に限度があった。そこで川西龍三社長は姫路市天神町の日本毛織姫路工場を飛行機工場に改装することに案を示し、昭和17年4月、用途変更として商工省に届けを出し、早速認可され、生産に至った。

姫路には飛行場が無く、造成中の加西郡の海軍の飛行場の一角を使用することで解決した。約20kmの遠距離を飛行機を輸送する馬車部隊の活躍となった。水上飛行機から改造された『紫電』の性能は十分とは言えず、川西の設計陣は根本的な設計変更として『紫電改』をデビューさせた。この機は海軍を満足させる性能のよいものとなり、増産を命じた。川西航空機は海軍指定の軍需工廠となり神武秋津工場の隠匿名が使われるようになつた。

昭和20年に入ると、鳴尾、姫路で生産が始まった。この『紫電改』が戦争後期活躍したことは戦史で明らかである。姫路では『紫電』466機『紫電改』44機が生産され前線に送られた。

試験飛行、輸送には第1001海軍航空隊が担当し、戦争後期には本土決戦に備え飛行機の隠蔽が行われ、その任務は海軍設営隊が当たつた。6月22日、姫路製作所は米爆撃機B29による空爆で壊滅的な被害を受け生産することが出来なくなつた。

鶴野工場では終戦まで運ばれて来た『紫電改』の組立て作業が行われた。終戦時70機の『紫電・紫電改』が残存。3機が米国に持ち帰られた他は、全機焼却されここに川西の歴史は閉じられた。

地元には苛酷な条件のもと、生産にかかわった多くの若人がいたことを忘れることができない。



生産中の局地戦闘機『紫電』一一型（乙型）